

東京大学社会心理学研究室 2014 年度修士論文

1. 大橋卓真「日本においてソーシャル・サポートの授受を抑制する負のフィードバック構造」
2. 櫻井良祐「既達成の目標によるセルフ・ライセンシング：自我枯渇時における自己制御過程に着目して」

1. 大橋卓真「日本においてソーシャル・サポートの授受を抑制する負のフィードバック構造」

本論の目的は、日本人の間でのソーシャル・サポートの構造として、サポートの要請が躊躇われる結果サポートの提供も躊躇われるという負のフィードバック構造が存在することを、サポート提供の受け入れられ方およびサポート提供頻度の比較文化的検証を通じて実証することである。研究1と研究2では、日本人の間では要請されていないサポートの提供者が肯定的な印象を持たれにくいと考えられていることが示された。研究3では、要請されていないサポートの提供者が肯定的な印象を持たれにくいと考える傾向は、米国人よりも日本人の間で強いことが示された。研究4では、自ら要請していないサポートを受容することは、日本人のポジティブ感情の獲得にとって必ずしも最適なサポート受容の形ではないこと、また日本人は自ら要請していないサポートが提供される可能性は低いと考えていることが示された。研究5では、日本人はサポートの要請を受けていない場合にはサポートの提供を控える傾向があることが示された。研究6では、要請されていないサポートの提供を控える傾向は、米国人より日本人の間で強いことが示された。一連の研究結果をもとに、日本においてソーシャル・サポートの授受を抑制する負のフィードバック構造の存在が、文化特定のソーシャル・サポートのあり方の理解や、文化的自己観理論に対して持つインプリケーションについて論じた。

2. 櫻井良祐「既達成の目標によるセルフ・ライセンシング：自我枯渇時における自己制御過程に着目して」

本研究では、セルフ・ライセンシングの観点から、既達成の目標が自己制御に与える影響を明らかにすることを試みた。セルフ・ライセンシングとは「先行の自己制御の発揮の認知が、後続の自己制御の不全を正当化し、結果として自己制御の遂行が低下すること」を指す。具体的には、自我枯渇は自己制御の不全を正当化する欲求を生起させるという想定のもと、「自我枯渇時に既達成の目標を想起するとセルフ・ライセンシングが生起する」という予測を2つの実験を通して検証した。実験1では、東京大学の学部生60名が実験に参加した。参加者は、自我枯渇（あり vs. なし；参加者間）×既達成の目標の想起（あり vs. なし；参加者間）の4つの条件のいずれか1つに無作為に割り当てられた。実験は、自我枯渇の操作、既達成の目標の想起の操作、ストループ課題の順に実施した。結果、自我枯渇した参加者が既達成の目標を想起すると、ストループ課題の成績が低下したことがわかった。したがって、本研究の仮説は支持され、既達成の目標は自我枯渇時において、自己制御の不全を正当化する「ライセンス」として機能することが示唆された。実験2では、セルフ・ライセンシングの生起を調整する個人差変数として、自己制御の不全に対する罪悪感を測定し、「自我枯渇時の既達成の目標によるセルフ・ライセンシングは、罪悪感が高い人にもみ生じる」という予測を検証した。また、自我枯渇操作として、実験2では社会的排斥操作を用いた。実験2には、東京大学の学生を中心とした学部生・大学院生103名が実験に参加した。参加者は、社会的排斥（あり vs. なし；参加者間）×既達成の目標の想起（あり vs. なし；参加者間）の4つの条件のいずれか1つに無作為に割り当てられた。実験は、社会的排斥の操作、既達成の目標の想起の操作、アナグラム課題、自己制御の不全に対する罪悪感の測定の順に実施した。結果、罪悪感が高く、既達成の目標を想起した参加者は、社会的排斥を受けると、アナグラム課題の成績が低下したことがわかった。したがって、本研究の仮説は部分的に支持された。他方、罪悪感が高く、社会的排斥を受けなかった参加者は、既達成の目標を想起すると、アナグラム課題の成績が上昇するという予測外の結果も得られた。この結果の解釈として、自らが目標を達成した経験を想起したことで、課題に対する自己効力感が上昇し、続く課題の成績も上昇したといった可能性が挙げられた。2つの実験を通じて、「自我枯渇時に既達成の目標を想起するとセルフ・ライセンシングが生起する」という予測は概ね支持された。とりわけ、実験2では、このセルフ・ライセンシングの生起が、自己制御の不全に対する罪悪感の高低によって調整されることが示唆された。加えて、既達成の目標の想起が自己制御の遂行に与える影響は、自我枯渇の有無によって異なる可能性も示され、今後のさらなる検討が望まれた。改善点としては、一般サンプルを用いることや、自我枯渇による自己制御の不全を正当化する欲求の生起を直接的に測定すること、経験サンプリング法を用いた生態学的妥当性の高い実験を実施することなどが挙げられた。